纳百态日本文化之表象
窥千层日本文化之内涵

日本文化百词窥

李芳/著

- 多年潜心研究成果积淀
- 精炼百词揭示独到视角
- 衣食住行、各家思想、文学艺术完全囊括
- 全景品味日本文化盛宴，领略东瀛别样气息

大连理工大学出版社

纳百态日本文化之表象
窥千层日本文化之内涵

百物窥

李芳/著

大连理工大学出版社
Dalian University of Technology Press

图书在版编目(CIP)数据

日本文化百词窥 / 李芳著. — 大连 :
大连理工大学出版社, 2012.5

ISBN 978-7-5611-6916-2

Ⅰ. ①日… Ⅱ. ①李… Ⅲ. ①文化—关键词—日本
Ⅳ. ①G131.3

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2012) 第 090227 号

大连理工大学出版社出版
地址:大连市软件园路 80 号 邮政编码:116023
发行:0411-84708842 邮购:0411-84703636 传真:0411-84701466
E-mail:dutp@dutp.cn URL:http://www.dutp.cn
大连力佳印务有限公司印刷 大连理工大学出版社发行

幅面尺寸:140mm×210mm 印张:7 字数:250 千字
2012 年 5 月第 1 版 2012 年 5 月第 1 次印刷

责任编辑:庄晓红 责任校对:何敬文
封面设计:王付青

ISBN 978-7-5611-6916-2 定 价:30.00 元

前言

樱花树下袅袅的东瀛风情，旋转寿司中原生的东瀛韵味，和服裙角下匆忙的东瀛脚步，时代在发展，世界在变化，日本这个国家展现在世人眼中的印象也在不停地发生变化。如何解读其文化精髓，如何看待其文化在当世的传承成为修习日语或了解日本文明的一门必修课。

笔者积多年生活之感悟，精心挑选百篇蕴含文化的主题为写作主线，从 100 个视角来阐述、分析日本特色文化的形成与特质，对其民族影响等，其中贯穿中日比较、日美比较及笔者的所感所想。在关键词的选择上，既包括代表传统日本形象的「和服」、「芸者」、「演歌」等文化，也包括「就活・婚活」、「フリーター」、「派遣社員」等现代文化，更包括近年来轰动全球的「東日本大震災」等重大事件。囊括了日本古今衣食住行、各种思想，以及文学艺术在内的多元文化组成部分。本书旨在通过利用有限的篇幅、独特的诠释，带领读者从一个全新的视角去品尝日本文化盛宴，领略东瀛生活的别样气息。

本书在撰写过程中，得到了日本武藏野学院（大学）博士生导师刘金钊教授、日本北九州市立大学博士生导师、民俗学家重信幸彦教授、日本儿童文学作家协会理事水上平吉先生、小学国语老师吉田美由纪女士、大连交通大学外教伊东正博等专家、学者的大力支持与帮助，以及在审校过程中执着敬业的王赫男编辑的大力协助，笔者在此一并表示最诚挚的感谢。

著 者

2012.4

目录

1. 挨拶……1
2. 愛想笑い……3
3. アイヌ……5
4. 曖昧……7
5. 朝活……9
6. 哀れ……11
7. いき……13
8. 刺青……15
9. インスタントラーメン……17
10. 浮世絵……19
11. ウチとソト……21
12. 海……23
13. 駅弁……25
14. 演歌……27
15. 宴会……29
16. 贈り物……31
17. お辞儀と握手……33
18. おせち……35
19. 鬼……37
20. お盆……39
21. おみくじ……41
22. 温泉……43
23. 会社……45
24. 鏡開き……47
25. 学習塾……49
26. 歌舞伎……51
27. 歌舞伎町……53
28. 上座と下座……55
29. カラオケ……57
30. かるた……59
31. カルチャーセンター……61
32. 過労死……63
33. 義理……65
34. 敬語……67
35. 芸者……69
36. 源氏物語……71
37. 原爆……73
38. 原発……75
39. 酒……77
40. 茶道……79
41. 自殺……81
42. 地震……83
43. 自動販売機……85
44. 社内ニート……87
45. 就活・婚活……89
46. 受験戦争……91
47. 正月……93
48. 正座……95
49. 制服……97
50. 蕎麦……99
51. 大学受験予備校……101
52. 畳……103

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

53. 単身赴任……105
54. 団体旅行……107
55. 忠臣蔵……109
56. 長寿の祝い……111
57. 鶴……113
58. 手土産……115
59. 床の間……117
60. 丼……119
61. ニート……121
62. 日本庭園……123
63. 日本舞踊……125
64. ネットカフェ難民……127
65. 根回し……129
66. 年賀状と暑中見舞い……131
67. 能……133
68. 俳句……135
69. 派遣社員……137
70. 箸……139
71. 恥……143
72. パチンコ……145
73. 初夢……147
74. 花見……149
75. 東日本大震災……151
76.100 円ショップ……153
77. ファミコン……155
78. 富士山……157
79. 不登校……159
80. フリーター……161
81. 勉強会……163
82. 返礼……165
83. 忘年会……167
84. 本音と建前……170
85. 間……176
86. 幕の内弁当……179
87. 松……181
88. 祭り……183
89. 漫画……185
90. 水俣……187
91. 無常……189
92. 名刺……191
93. 結納……193
94. 幽玄……195
95. 落語……197
96. 琉球……199
97. 和歌……201
98. 侘び・寂び……203
99. 和服……206
100. 和洋折衷……209

参考文献・ウェブサイト……211

1 挨拶

最近は、学校や職場などの団体などで「挨拶をしましょう」と言うと、「なぜ挨拶が必要か？」と質問する人がいるという。そこで挨拶の必要性について考えてみる。

挨拶は相手の存在を認め、私はあなたとコミュニケーションが取りたいという意思表示を行動として表わしたものである。あるいは「あなたは私がコミュニケーションを取るに値する人ですよ」と認める意思表示とも言える。

挨拶を示す言葉として「オアシス（運動）」というのがある。この中の「オ」は「おはようございます」の頭文字で、相手の存在を認める意志を表示するものである。つまり「気持ちを伝えるもの」ではなく、相手に「あなたは私の気持ちを伝える対象ですよ」ということを示すものだということである。「ア」は「ありがとう」の頭文字で、感謝の気持ちを示す意思を表示する。「シ」は「失礼します」の頭文字で、コミュニケーションの終了の意思を表示する。「ス」は「すみません」の頭文字で、謝罪の意思を表示する。

霊界での魂同士は、相手が何を考えているかが全てわかるが、現世の人間同士は相手の腹の中がわからない。相手と円滑にコミュニケーションを図るためには相手の腹の中を探るより先に自分の腹の中をさらけ出す事が必要である。つまり両者が理解できる言葉や文章などによる情報のやりとりができないといけない。挨拶はその一歩、取っ掛かりに当たる。

挨拶はコンピューターで言うなら、他のコンピューターなどがデータをやり取りする対象である事を確認しておくことに相当する。確認をしてお

けば、必要な時にいつでもデータのやり取りを開始できる。

人間社会ではたとえ相手が苦手な人でも、同じ会社の人や取引をする人は、コミュニティーの中で情報の共有をしないと、その組織や社会の機能は低下する。

接客業などで形ばかりの挨拶をする人をたまに見掛けるが、接客が必要な職場で従業員に形だけの挨拶を強要しても、本人が相手とコミュニケーションを取る気がないのであれば、それは愛想のない応対になって逆効果である。形だけ整えても、心は伝わらない。お客様が自分の店に来てくれるという感謝の気持ちが芽生えてはじめて、心の伝わる挨拶になる。挨拶の言葉はそれ自体には意味は無い。特に早いわけでもないのに「お早う」、苦労をねぎらう意味がなくても「お疲れ様です」という挨拶もある。しかし、その意味のない言葉こそ、コミュニケーションを取るための一番意味のある言葉かもしれない。

挨拶の方法は国によって様々である。言葉を使わず、握手をするのも、もちろん立派な挨拶である。

同じ組織に属している人間は、例えば同じ制服を着ることによっても一体感を得ることはできるだろう。しかしそれだけでは何かを共有しているという実感には乏しい。お互いに顔を知っている（顔見知り）のは、一歩進んだ状態であるが、それだけで話を始めるのにはもう一歩が必要な感じがする。そこで必要になるのが挨拶ではなかろうか？

挨拶は空気のように、特に意識せずに毎日している人が多いと思う。しかし、これからは大切な仕事という意識でやってみよう。笑顔で、相手の目を見て、明るく大きな声で「おはようございます」と挨拶すると、印象が変わる。明るい人に見られる。やる気のある人に見られる。印象が変わると、人生が変わる。

2 愛想笑い

柳田国男氏は『笑いの本願』の中で、声を上げる笑いと無言の笑いとを区別し、女の子にえくぼがあることをよろこぶ風習について、その子が人に愛されるであろうことを願う親の心にふれている。無言の好意の表現は、日本流の社交術である。

「今日は」「ありがとう」と言葉に出していう欧米人の社交術は、ちがう文化グループのいりまじる中で、個人としての意思表示をしっかりとする必要に根ざしているが、その習慣は、日本に今も広くあるとは言えない。日本人がこれまでの無言の好意の表現をたずさえて海外の人たちにまじると、軽んじられることがある。しかし、そのことで、無言の好意の表現そのものを、低く見る必要はないと思う。

海外の人に、日本人が愛想笑いをもって対することは、面従腹背の感をあたえる。ダブル・クロス、つまり裏切りの常習犯であるように見なされる。平和特使をおくりながら、真珠湾攻撃をもって戦争のひぶたを切る。その時の平和特使栗栖三郎大使の名をとって「クルス」という動詞が、1941年12月8日以降のアメリカの新聞でしばしば流通していた。

はっきりものを言う習慣を、海外のさまざまの交流において、日本人はまだ身につけていない。相手の身になってその言葉を聞くという態度の表明として、「はい」と日本人は言うことがあるが、それは、「私は聞いていますよ」というあいづちをうつことである。それを、「私はあなたと同じ意見です」という合図とまちがえて、「君は私に賛成だと言ったではないか、それなのに……」とおしこんでこられると、うろたえる。日本語の

「はい」は英語の「イエス」とはちがう。英語の「イエス」は同意の表現であって、かるがるしく口にしないほうがいい。

保田與重郎氏は、日本人には、相手の言うことを正しく（自分流になおして）聞くという伝統があったと言う。そうだろう。その敬老、敬客、敬外国人の態度が、海外に出ると逆手をとられることがある。むしろ、愛想笑いなしの無言にしかず。もっとよいのは、その場で、自分の意見のちがいを相手につたえることである。

しかし、はっきりと、自分の意見のちがいを相手につたえる習慣を身につけるとしても、無言の好意の社交術を捨てさってよいというものではあるまい。日本のほうは近代の欧米流の交渉の流儀よりももっと前からある、おなじ人間という動物の種に属するもの同士の好意の表現であり、もっと根源的なものである。そしてそれは、環境を破壊して住む場所をせまくした人類にとって、共生の必要から来る、未来への願いである。

3 アイヌ

アイヌ民族は日本列島とその周辺のどこに生活していたか。サハリン（樺太）やクリル（千島）、北海道にアイヌがいたことはまぎれもない。では津軽海峡を南にこえた本州島はどうであろうか。その手がかりはアイヌ語地名の分布から推測できる。

アイヌ語地名研究に半生を捧げた山田秀三氏は仙台平野の北端と秋田・山形の県境をむすぶ線の北側にはアイヌ語地名が濃厚に分布していると指摘している。そこで何が分かるかといえば、青森、岩手、秋田の三県にはアイヌ語を解する人々が住んでいて、日常的にアイヌ語を話していた時代があったということである。それは北海道系の続縄文土器とか擦文土器が東北地方の北半分にも分布しており、北海道と共通な土器文化圏が描かれることと対応する。そこでアイヌであるかどうかは別として、北海道の南部と東北地方の北部に和人（倭人）の文化とはちがった独自な文化が存在していた時代があったことは疑えない。このことは、中国の史書『新唐書』 にも日本国の東北の方向に大きな山があり、その外側には倭人とは別種の毛人が住んでいると記していることからも裏付けられる。毛人は毛深い人の意味でアイヌを連想させるが、毛人と書いてエミシと訓ませる場合もあることから蝦夷と考えられなくもない。東北地方の北半分、つまりアイヌ語地名の濃密な分布の見られる地域は、蝦夷が勢威を振るったところと重なる。そこで蝦夷とアイヌを安易に同一視することはできないにしても、両者の関係を否定するのは不自然である。かつて東日本を中心として幾千年もの間、縄文時代がつづき狩猟文化がさかえた。そしてアイヌも狩猟民族であり、また東北地方のマタギの山言葉に近世までアイヌ語

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

が混じっていたところから、縄文時代とのつながりにおいて、アイヌと蝦夷を考えてみることはきわめて重要である。

動物や植物などと深く交流し、自然と対話していた狩猟時代の名残りはアイヌの信仰、習俗や神謡、文学に認められる。アニミズムやシャマニズムに基づく人間観はアイヌ民族の中に連綿と伝えられている。その人間観は一口に言えば神と人間と自然の三者の共生である。たとえば生まれて間もない赤ん坊が何か訳の分からぬことを独り言しているのを見ると、アイヌの人々は赤ん坊が神の国から人間の国に生まれたばかりだから、神の国の言葉を話しているのだという。ボケ老人が訳の分からぬことをしゃべっていると、やがて神の国に入るので、神と対話しているのだという。このような弱い者にそそぐあたたかいまなざしがアイヌ民族の人間観の底に流れている。それは、文明社会の行き詰まった思考に一筋の光明をもたらすことはまちがいない。これまでアイヌ民族の文化を研究対象としながら、その人間性に眼をむけないことが多かった。だが、先住民の復権が叫ばれる今日、アイヌ民族の人間観がわたしたちの希望を未来につなぐ確かな糸であり得ることをあらためて強調したいのである。

4 曖昧

こういう話を見かけた。「最近見かけませんでしたが、どうしたんですか。」と聞かれ、「三日間旅行していました。」と答えたら、変だと指摘されたアメリカ人がいるそうだ。そしてその指摘をした日本人は、そういう場合は「三日ほど旅行していました。」と答えるべきだと言ったそうだ。なぜなら日本語は曖昧を好む言語であり、「三日間旅行していました。」は明確すぎるからだという。そのアメリカ人は日本文化の曖昧性についてしきりに感心していた。

しかし、日本語が曖昧を好むという説はうさんくさい。そもそも日本語が特殊な言語だと誤解している日本人が多過ぎる。言語学の立場ではどの言語も論理的だし、本質的には大した違いはないのだ。日本語のある文が曖昧に見えるなら、何か隠れた理由があるはずだ。

曖昧を好むといっても、「何日間旅行していたんですか。」と聞かれて「三日ほど旅行していました。」と答えるのは変だろう。その場合は「三日間旅行していました。」と答えるべきだ。なぜなら、要求された情報をぼかすのは変だからだ。言語学では、このような重要な新情報やその要求を焦点という。

日本語では焦点かどうかが文法的に重要だ。例えば、「私は高杉です。」と「私が高杉です。」を比べると、後者は主語に「が」が付いている。これは「私」が焦点だからだ。つまり、「誰が高杉さんですか。」という質問に対して、「私が高杉です。」というように、「私」の部分が焦点だから「が」を使うのだ。逆に「あなたは誰ですか。」という質問には、「私は高杉です。」と答える。「高杉」が焦点で、「私」はすでに出てきた旧情報（これを主題という）だから「は」が付くのだ。

最初の質問に戻ろう。「最近見かけませんでしたが、どうしたんですか。」と聞かれた場合、当然何をしていたかが焦点になる。それ以外の情報は単なる付け足しである。だから答は「旅行していました。」で十分だ。しかし旅行なら行き先や期間も話の対象になり得る。だから「三日間旅行していました。」と答えても良い。

ところがここで問題が起きる。日本語は、焦点が動詞の直前に現れやすいのだ。世界の多くの言語に見られるように、日本語では旧情報から述べ、

その後で新情報を出すという語順がある。ただし動詞が必ず最後に来る必要があるため、動詞の直前が焦点の主な出現場所になるのだ。ところが「三日間旅行していました。」と言う場合、焦点は動詞なので、「三日間」を焦点と解釈されると落ち着きが悪い。つまり言いたいことは旅行していたということなのに、三日間という期間が重要な感じがしてしまう。日本語が旧情報を先に言い新情報を後に言うという仕組みと、動詞を最後に言うという仕組みを持つ限り、この問題は回避できないように見える。

しかしここで語彙の助けを得れば良いのだ。期間に「ほど」を付けると、曖昧な感じがするのでそれが重要な情報には思えなくなる。「三日ほど旅行していました。」という文は「三日ほど」が動詞の直前に来ているが、「ほど」が付いているため重要には見えないのでそれが焦点と解釈されることはない。「三日」が単なる追加情報だと分かるわけだ。だから「ほど」を付けるほうが良いのだ。期間を曖昧にするのは、日本語が主題から焦点へ移る語順を持ち、また動詞が必ず最後に来るからだ。そのため動詞の直前の句を非焦点化するために「ほど」という曖昧さを持つ単語を使うのだ。期間に比べ、土地の名はそれほど焦点の感じがしないので、「三日間、京都に旅行していました。」という答は何もおかしくない。

「三日間」などの期間が焦点の感じを持ちやすいのは、また別の文法から来ている。日本語では数量詞遊離といって、数字を含む句が修飾する名詞から離れる現象がある。例えば「二匹の犬がいる。」という代わりに「犬が二匹いる。」と言うのが数量詞浮遊だ。数量詞浮遊もまた焦点と関係している。数が焦点となる場合、数量詞浮遊が起きるのだ。例えば、「八十円切手を五枚下さい。」という文を、「五枚の八十円切手を下さい。」と言ったら変なのは、「五枚」が焦点だからである。先に書いたとおり、焦点は後に現れるべきなのだ。一方、「男が五人いる。」の後に「五人の男は去った。」と言うのは良いが、「男は五人去った。」と言うのは変だ。「五人」はもはや焦点ではないからである。このように、独立した数量詞があると焦点のように見える。

「三日間旅行していました。」の「三日間」は動詞を修飾する語句であるため元々独立した句だが、数量詞浮遊の類推から焦点のように思われやすい。だから期間は「ほど」を付けて曖昧にするほうが良いのに対し、土地の名は曖昧にする必要がないのである。

冒頭の日本人は以上のように説明するべきだった。「三日ほど」というのは決して日本語が曖昧を好むからではない。曖昧な日本語があるとすれば、それは曖昧な人の話す日本語である。

5 朝活

就職活動が就活、結婚相手を見つける婚活、子供を入れる保育園を探すのは保活。新しい略語が次々生まれる中で、字面から意味をすぐ想像しにくいものの一つが朝活（あさかつ）である。早起きし、出勤前の時間を何らかの自分磨きに充てることを指す。

▼ある生命保険会社が昨年秋、20代と30代の会社員男女に聞いたところ、4割が朝活実践中と答えたそうだ。カフェで読書会や勉強会を開いたり、スポーツや資格取得の教室に通ったり。早寝早起きは健康にもいい。それなら上司の酒に深夜までつきあうより、朝食がてら社外の同世代と情報交換を、という感覚か。

▼最新版のレジャー白書によれば、余暇市場は昨年まで8年も続けて縮小し、ドライブ、旅行、外食などを楽しむ人は軒並み減っている。一昨年に上位20位に入っていた項目で唯一参加者が増えたのは「学習・調べもの」だ。人々の関心が知的好奇心の満足に向きつつあり、朝活ブームもその一端と白書は分析する。

▼リーマン・ショックが変えた米国の消費を描く「スペンド・シフト」というルポがある。自己防衛のため学びが盛んになり、身近な知の拠点である大学や図書館に人が集まり始めた。「米国人はモノより知識を蓄えようとしている」と著者は言う。

（以下、略）　（出典：日本経済新聞（春秋）2011.8.8）

出勤前の早朝に勉強会などに参加する「朝活」が若手ビジネスパーソ

ンの間に広がってきている。交流サイト（SNS）を使って業種や世代の違う参加者と出会い、人脈をつくる。早起きは楽ではないが、先行き不透明な時代を生き抜くための自己投資に励む。

今、なぜ、朝活か。 時流の「本質」の変化に気付いたからではないか。

今まで何とかやってこられたから、これからも何とかなるだろう。上司から言われたことをきっちりやり、一生懸命働けば、給料がもらえる。会社（商工会）は定年まで面倒を見てくれる。

これらは過去の良き時代の常識である。この良き時代の常識を私は「20世紀の常識」と呼んでいる。これからは「丸腰」では生きていけない。自らを守る「武器」が必要な時代になった。これからのビジネスで雌雄を決する武器とは「知」であり、「知」の蓄積がなければ、落後していく。これが「21世紀の常識」である。21世紀の常識に気付いた経営者・サラリーマンが、熱い思いで参加しているのが朝活なのだ。

しかしビジネスの世界では、「知」の競争は10数年前から始まっている。何を今更、朝活なのかという印象を受ける。

1997～98年頃から一貫して、なぜ、企業数の減少が続いているのか。企業破綻の原因はさまざまであるが、究極の原因（真因）は唯一である。成り行き経営を継続し、「知」の蓄積をないがしろにしてきたことにある。否、「知」の蓄積を行う方法・手段を見いだせず、長期低落から破綻を余儀なくされた企業の存在も見逃してはならないだろう。

6 哀れ

「あわれ」が言葉として深さとひろがりを持つようになったのは平安時代の中ごろであろう。近ごろでは「ミジメ」とか「フビン」という感じにばかりあわれをとらえているのは単純すぎてつまらない。かつての「あわれ」は、うれしいことにも面白いことにも、楽しいことにも言ったので、現代語の「スゴーイ」に近いかなと思ったりする。

王朝の宮廷では春と秋とどちらが情趣が深いかを争った記録があるが、教養人にとって美を感ずる心の豊かさが大切な資格であった。もちろん自然だけではない。光るばかりの美貌のひと、みごとな装束、空だきものの香のほどよいへやのたたずまいなどすべてあわれであり、人の心のやさしさ、つれなさすべてあわれで、「あはれと思ふひと」は恋慕している相手のことをいうのだった。

こんな言い方をすると王朝人は何でも「あわれ」の一言で片づけてしまったように聞こえては困る。ただ「いいな」ではなくて感動がなくてはいけない。それも物狂おしいほどの感動が含まれたときにあわれは真価を発揮する。

一瞬呆然自失、ゾーッとして、身の震えをおぼえる。これが「あわれ」を知ることなのであった。

『源氏物語』のなかの主調音を、「もののあわれなり」と言い出したのは本居宣長であるが、たしかに王朝人の美意識の極限はここに氷結されているという感じである。典拠好きの日本人は以後あらゆることの美の規準を『源氏物語』に求めるので、当然「もののあわれ」は文学の世界でも、美術工芸の世界でも、長くかつ繰り返し生命を持ちつづける。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com